

えんぎがいいね

「三毛猫の雄は珍しい。しかもなんでか知らんが縁起がいいと信じられている」

「そりゃ珍しいからでしょ？ 二つ頭のあるアナコンダが珍しいっていうからいつぞやの水曜すぺしゃるかなんぞで追いかけてまわしてたし……」

「じゃあそーゆー人間は縁起がいいか？ 無茶が苦茶になるほど珍しいぞ」

「そんなんぶらっくじゃっくやあるまいし……」

「ついでに頭が馬で身体が人の頭馬人が生まれたりしたら縁起がいいか？」

「……なんでそーゆー風になんのお？ すぐ人いじめる」

「頭が魚の魚人……」

「もうやめてよっ！ なんでそんなえぐいのばっか言うのよっ！ だいたい人魚がいるからそれでいいの、魚人なんて要らないのっ!!」

「しかし、頭馬人はいたんだ。江戸時代の瓦版によると……」

「タブロイド版じゃなかったんだね」

「いいから、その瓦版によると馬に襲われた女の人が十月十日を境、生み落とした子供はなんと首から上が馬のそれだったと、イラストつきで紹介されている」

「ふーん、誰がそれを信じるの？」

「……信じない？」

「うん！」

「だったら、目の中の瞳が五つある子供とか、足の裏に五芒星が描かれた子供とか……」

「ふーん」

「……だ、だったら、東北の山に怪物が現れるってんで侍が退治して掴まえてみれば全身毛むくじゃらで太いしっぽ、頭はなんかしわしわで……」

「なんなん？」

「さあ……」

「あのねえ、なんかもっと確かなものはないの？」

「江ノ島沖にアシカさんが流れついたのでみんな見物に……」

「……おもしろくない」

「だろ？ だからもっと、こーゆー話のほうがかつての人にもうけた訳だ。お堀の掃除で水を抜いたら全身金色に輝く鱗をまとい、胴側面にはぎょろっとおめめがついていた魚の死体が見つかったとかね」

「つまり、おもしろけりゃうそでいい訳なんね？」

「うそじゃないのっ！ とにかくどっかは本当だったんだろうねえ……。だいたい頭二つはないけど、時々は指が六本の子供だって生まれるんだ。完全に六本じゃなくても、小指が途中から別れているとかでちょっとした奇形なんぞは今でも遺伝的か突然変異かはわからないにしても、とにかくある確率で生まれてきてしまっている。多分、突然変異だろうな」

「じゃ、厭だな……。生まれちゃったらおお当たりなんでしょ？ どこにも行けないけど」

「奇形という言葉は差別的だから遣うべきではないという話もある。つまり、奇なる形は縁起がいいとは言えないんだ。この際、遣うが」

「でも、六本とか七本とか見たことないな……」

「そりゃ今じゃ当の親も知らない間に生まれてすぐそーゆー処は整形されちゃうからね」

「じゃあおめめが三つとかも生まれるの？」

「いや、それは聞いたことない。一つ目なら聞いたことあるな。どこだったかヨーロッパだと思うけどその一つ目がちゃんと真ん中に生まれた子供もいたという……。十二、三で亡くなられたけど……」

「それも瓦版？」

「厭味なやっちゃな」

「わーい、タブロイド版だあ」

「知るかつ！ ……雄の三毛猫は遺伝情報の狂いから生まれる。弱いらしいが、越冬隊の雄三毛猫はつつがなく日本に帰ってきた。しかしその後失踪し、どーなったかは誰も知らない」

「そーゆーおちがないと駄目なの？」

「別にほんとのことなんだから仕方がない」

「……二つ頭の蛇も遺伝の狂いの？」

「あれは卵になんらかの刺激があったため、らしい。」

亀さんの二つ頭もいる」

「じゃあ鶏さんも頭が二つに……」

「記憶にない。爬虫類だから起き易いのかも知れない。それよりも卵に刺激を与えると受精したと思って勝手に分裂を始める時がある」

「核分裂ね」

「違うっ！ 単精生殖！ この場合卵にはX遺伝子しかないので、XX、つまり雌しか生まれえない筈だ。人間でもあるらしいが確かな例はない」

「きりすとさんは男の人だったと思うけど……」

「奇跡は科学では取り扱えない分野。でも確かに奇跡は実在してしまう。それを科学という人類の英知の結晶のようなちんけなもので説明することはできない。だからキリストは復活だとしてしてみせた」

「ノリ・メ・タンゲレ（訳：私に触れるな）ってやつね。だったら科学なんて面白くないね。やっぱうそでいいから面白いことのほうが……」

「しかし科学は人類がその存在を未来へと遺すべく与えられた数少ない手段だ。現にメキシコの1万数千年前の地層だったろうか……そこにはかつての人類の英知、科学の結晶たる証しが遺されていた。されにその下、これは3万年以上前の地層だったが、そこにもそのかつてのさらにかつての人類が遺した科学の結晶が発見された」

「へえ……人類ってそんな大昔にも科学文明を築き上げていたの？ ……で、なんなん？」

「……ガラス状に冷え固まった地表面だ」

「なるほど、でもガラスの精製技術くらいじゃそれほどの科学じゃないと思うけど……」

「最近まではアメリカのネバダ砂漠なんかでそれと同じ代物を生産していたよ、核実験で」

「つまり、核分裂ね……」

「核融合もあったんじゃないのかね。……ま、なんにせよ、そーゆーこっちゃ」

「つまり、有精生殖……」

「そーじゃない。ほんとにわかってくれたの？」

「うん！ほんとにわかってしまった」

「じゃあ、説明して？」

「つまり、科学の勝利」

「……」